

## 日本芝居の初見物

黒田清輝

（歌舞伎座の道具立）

御引受けはしたものと、全く芝居の事は素人ですからどうも、併し何とかお話を致しませう。私のは役者の評ではなく、その藝人と藝をする場處とに就て起つた感じを申上げる迄です。尤も私の感じは私が専門として居る畫といふ事が土臺となるのは申上げる迄もないのですが、お話の内に或は釣合といふ事から、藝の方へも及ぶすかも知れない。これは私が藝を知つて居るので評をするのではなく、側の釣合から其方に及ぶかも知解らないので、つまり専門の畫の方から云ふ評だといふ事は、今申上げた通りです。併し人のやつた技にも非常に旨いと思つたのは、一つ二つありますから、添へて申上げて置きたいと思ひます。そこで私は先づこの芝居といふ物が嫌ひなのですが、この芝居が嫌ひだといふ事に就ては原因があつて、天然の性質が嫌ひなのか、教育なのか、是は殆んど解らないが、多分教育の方だらうと思ふ。尤も前には一般に芝居と云ひましたが、私の嫌ひといふ芝居は日本の芝居であつて、西洋で日本の芝居に類した藝の内では、大變私が好きなものもあるのです。それから押して見ると、日本の芝居が嫌ひだといふのは、天然でなく、或る教育から起つたものだらうと思ふのです。それで私が芝居を嫌ひだといふのは、云ふ事柄が間違つて居やせんかとも思ふこともあるのだが、勿論見た事がないし、又見たいといふ觀念も今迄は起らなかつたから、人にも嫌ひと云つてたのです。その見たいといふ事の起らなかつた原因は、つま

り私の日本を出たのは満十七歳の時で、それ迄は芝居なぞへ行くといふ機会をりが更になかったのです。さうして夫も内の者が豫て芝居の方に縁の近いものであれば、假令ば父母が好きで見に行くとか、文學の方から感ずるやうな作を芝居でやるとかすれば、十七歳の者でも、芝居を随分見たり、それに就ての好みも起つたであらうが、もとよりそんな機会はづみもなく、それに私の親父は芝居は嫌ひな方でしたから、私も芝居といふものは、どういふ事か解らず、只下らない事を演るものかと、早呑込みをして居た位で、眞實ほんたうの芝居に對する觀念は皆無であつたのです。それで歐羅巴に行きましてから、詞ことばを第一に稽古をする。それから詞と文學とは關聯して居るものだから、其方に向つて文學の研究をやる。それで文學 藝に現はして見せる場處にも行くと、かう云ふ順序になつて來たのです。それでその結局つまつが芝居に行くことになつたのですが、その種類に文學を主に土臺にするのと、音樂の方を元にするのと、それから兩方を相合したやうな種類の物と、種々見せものがあるのです。その内で私が非常に感心もするし、大變好んで居たものは、文學を技に演ずるやつなのです。それで先づこれだけのお話をして置けば、私の芝居に對する教育と感情といふものは、略ぼほお解りになるだらうと思ふ。つまり普通人とはそれだけの懸隔があるといふ事を、預めお話をして置くのです。それで私が今度初めて日本の芝居を見ることになり、同好看劇會のお誘ひで初めて歌舞伎座を見たのですが、それで起つた感じをお話をするといふのは、随分あつかましい仕方ではありますが、役者の名といつても團十郎を つて居る他には、一つも知らない位な私が、自分の淺墓な考を充分に發表して見たならば、ヒヨツとかして又其方の當局者の御參考になる事がないとも限りませんし、私自身としては、これからどの位か芝居を見るといふ事に就て進歩してから、あの時にはあゝいふ馬鹿な事を云つたかといふ、其時の

御笑草の爲に今お話をしても面白いだらうと思つて、御引受けをしたのです。處で先づ一番最初に惣くるめの感覺をお話して、その後細かい事に涉りますが、私の惣くるめの感覺といふのを一口にお話をすれば、金モールの大禮服を着た人が、おでん屋で立ち食をして居るといふ感覺が起るので、これは私が見た幕では總て初めから仕舞ひまで、この感じが付纏つて居つたのです。大禮服を着た人がおでん屋で立ち食とは何の事かと云へば、この非常に立派な衣裳を着て、立派な藝を演ずる人に対して、その藝を演ずる場處の至つて粗末なのに驚いたのです。もう一つ是を詰めて判然いへば、道具立と役者との釣合が取れないので、役者は如何にも藝の上から、或は藝といふのは習ひ覺えた式に習つて居る藝で、役者個人として寫實的の意匠を持つて人を感動させやうと力めて居るに係らず、それらの藝を引立たせる爲に用ゐて居る處の道具立といふものが、如何にも冷淡に見えるのです。つまり道具立の方からも、役者が人を感動させる事に力めて居るだけ勤めなければならない筈なのを、道具立の藝道と、役者の藝道と離れ／＼になつて居て、一向に釣合が取れないと思ふので、この二つの物の一致が缺けて居ると思ふのです。まづ團十郎といふやうな立派な藝人のみならず、それに續く處の名人の連中を、かういふ粗末な道具立の中で演らせるといふのは、これを見物する日本人全體が、只藝といふだけの方に氣をつけて、それを重く見て居て、道具立といふ方の事には、無感覺であるが爲だらうと思ふのです。又詞を替へて云へば、藝とそれから其の附屬たるべきものと、別々に離して見る一種の能力を日本人が持つて居るが爲に、かやうなる事が到來したので、日本の芝居といふ物は、これで構はない、これで十分だと皆な思つて居るかと、實は初め感心して見て居つた次第であるのです。處で見て居る内に、竹田街道の幕となつた時、その幕が明いて未だ役者がその形を備へつけない内に、看客の

一同から非常な感歎の聲が起つたが、この聲といふものは確に役者の藝道に向つて發した聲でなかつた。これに據つて見れば、好いものを見せれば好く感ずるといふ事は確であると思つた。尤もこの時の道具立が他の時よりも幾分か意匠を用ゐてあつたのだが、其の意匠たるものは決して十分な物と思へん處ではない、餘程幼稚なものであつたのです。それでも人に感動を與へるのは此中で藝をする役者の藝と、その道具立とが、他の場處よりも餘程添ふて居ると思はれる。さうして見れば日本の芝居だからと云つて、矢張外國でやるものと同じやうに、眞實らしほんとうく物を見せて、人に感動を與へるといふは、主になつて居つて、只藝そのものだけを見せれば、他はほかどうでも好いといふ譯のものでもないやうに感じられる。さう極つた以上は、私の感じた處では、どうしてもこの藝といふものと、道具立と云ふものとは、共に相助けて行かなければならない、それで好く昔から譬喩の通りの唇と齒といふ親密な關係を持つて居ると同じだ。それでこの道具立といふ事に就て、若し私の云ふ事が適當だと思へば、以來は、一層改良を加へて、役者相當の道具立にして貰ひたい。さうでなければ前申した通り、大禮服がおでん屋の立食としか私には思はれないし、何故團十郎その他の名優が、かういふ處であれ程の藝術を承諾して居るかといふ事を、甚だ不審に思ふのです。もしも假にこの道具立なるものが、平均に竹田街道位のものとなれば、演ずる處の藝は今日見た處のものよりも、一層立派に見えるに違ひない。況して竹田街道以上であつて、役者の藝道相當位のものにしたならば、猶更その藝の引立といふものが立派なものだらうと思はれる。然らばこれを何うしたならば立派に見えるだらうか。これはとりもなほさず役者が藝を磨き、又人の感動を多くする爲に、或點までの寫實を試みると同じやうに、矢張この道具立の方にも、これだけの注意を要する事だ。この注意がありさへすれば、一遍に立

派なものが揃はなくつても、自然役者に名優が出来ると同じ程度までに、此方も進むことが出来ると極つて居る。それで此道具立の内、建築に屬する部類、それから繪畫に屬する部類、何れにしても今日の處では、皆な至つて幼稚なものです。實際は昔より幾分かの改良が加つてあるのか知りませんが、初めて此歌舞伎座を見た私の眼には、その歴史といふものと、仕來りとの二つと云ふものは、全でないのですから、道具立といふ方のものは、餘程後れて居るのみならず、その役者の藝に添ふて行かうといふ感覺も見えない。それで寫實といひましても、つまり芝居の事であるですから、寫實らしく見ぬるといふ事が主であるので、眞實ほんとうらしく見ぬるのであるのです。それで眞實らしく見せるに就ては、役者の藝の内では、眞實の事をしては、眞實らしく見えない場合があるから、眞實らしく見せるといふ事に就ては、眞實の儘をやれと云ふのではない。そこが藝術と實際との分れ道で、何しろらしくといふ事を眼目にしてやつて往かなければならない。それで道具立も矢張、物をそのまゝやれといふのではなくつて、その儘らしく見ぬるものにやるといふ工夫をしなければならぬ。さうするのは、道具立の拵方、又は割合のやり方といふ事がありますが、これ等に就ては又一種の専門技術で、この事を委しく今日お話しする必用はないから、これは廢やしとして、今日のやり方では、あれ以上に道具が出来ないとすれば、先づそのやり方といふものは、迎むかへ今日日本には適しないではなからうかと思ふので、現に役者の藝よりも劣る事は前以て云つた通りだから、好くして見せるに越した事はないと信じるのです。それで眞實らしく見せると云ふ事に就ての道具立の拵方、或は書割の書方といふ事は、今日云ひませんが、その二つのものをば、尤も眞實らしく見せるには、どうしても缺くべからざるものが一つあるのです。これは何だといふと、その繪で申せば畫面の一致といふ事があるの

で、これを芝居に<sup>は</sup>適めて云へば、舞臺の一致とでも名付けたら好からうかと思ひます。これは無論芝居の仕組には必用な事で、此方に就ては一致を缺いて居ないと致して、色彩の取合せ、人物の配置、これから人と道具立との關係、これの一致を計らなければならない。これらのものと一致に就て、その媒介者なり、主宰者なりといふべきものは、何だといふに光線です。その光線といふ事に就て大いに研究を要する事だ。假令ば竹田街道の夜の場に、棧敷から來る晝間の光線が、左り右の區別なくさしかゝるのだから、其他の場合は押して知るべしです。それから道具立と書割とに遠近法の割出しといふものを、今日の處では少しも用ゐて無いが、これも多分かういふ法を用ゐれば、一層に實際らしく見えるといふ事に氣付かないのであらう。若しこの遠近法を用ゐた道具立及び書割を、適當な光線で照して芝居をやつて見せたならば、よもや見るものも不満足に思ふことはあるまいと信ずる。今度の内で一番好い道具立の場處でも、かういふやうな事があつては、これで夜だといふ觀念を誰が起すか。勿論今日の看客は道具立といふ事には注意をしない人達であるから、只筋書だけを聞いて、さうして夜だといふ積りになつて居るが、看客が満足して居るからといつて、見せるといふ方の側からこれで充分だと思つて居るべき筈のものはなからう。それを細かに云ふと、光線といふ事に就ては始めから仕舞ひまで立派に出來たといふものは、一つも見なかつた。この光線といふ事を好く理解して、これが主になつてこそ、舞臺の一致といふものが出來得ると思ふ。もしこれが古代であつて或は芝居といふものをば、その外光の内で演ずるとか、又小屋掛でやるとか云ふやうな時なら致方もない事です、今日のやうに電力を利用して、どういふ光線でも拵へる事の出來る場合に、この便利なものを利用して、舞臺の一致を計らないといふのは、甚だ私には解し難い事だ。そこで舞臺も西洋のは下から斜

面になつて居て、書割等の遠近の差が鮮明である。それから芝居の建築全體に就て、又その内の舞臺の構造などの事に就いては、細かに感じた事もありますけれども、これは建築家の方に屬する方ですから、今日は私は申しません。只これに就ては幾分かの希望を述べて置きたいと思ひます。見物人としては今少しくコンフォルタブルでありたい事を望みます。それから日本の芝居の特色と思はれる處の花道と廻り舞臺といふものは、私は保存して置きたいと思ふ。併し廻り舞臺は筋書のこれに適するやうに出來たものを演ずる場合でなければ、歌舞伎座の如き大芝居にこれを用ゐる必要があるか無いかは考へものだ。さもないれば狭き場處を廣く用<sup>つか</sup>ふには便利だが、元來廣い場處があるとすれば、二つの違つた道具立を、一つの幕の内に見せるにも限るまいと思ひます。

編者申す。これから俳優の技藝に就てのお話がありました、それは編輯の都合で、合評の中へ加へることに致しました。

『歌舞伎』三五 明治三六年四月

『黒田清輝日記』第二卷によれば、明治三六年三月二三日の日記に、黒田は「正午ヨリ歌舞伎座見物ニ出掛ク 団十郎 権十郎等ノ芸ヲ見ル 本当ニ芝居見物ヲシタノハ生レテ今日が始メテナリ 今迄ニテハ俄ノ外ハ先年京都ニテ女芝居ヲ二幕ト赤阪ノ演技座ヲ二幕カ三幕見タ計ナリ」と記している。また雑誌『歌舞伎』第三五号（明治三六年四月）の雑報には、日記の記述とは一日異なる三月二三日に歌舞伎座を見物した同好観劇会第三回参会者として黒田の名がみえる。同好観劇会は『歌舞伎』の発行所が組織した会で同年一月に発足、大学出身の博士学士、文学者、画家、実業家およびその家族によつて構成された。黒田が見物した演目は「清正誠忠録」、中幕「吉例曾我礎」、第二番目「花盛劇楓葉」。劇聖と称された九代目市川団十郎は「清正誠忠録」で大御所家康公と加藤清正を、「吉例曾我礎」で工藤祐経を演じ、その年の九月に六十六歳の

生涯を閉じている。なお黒田の日記によると、観劇から三日後の三月二十五日に「午後雑誌歌舞伎ノ為芝居見物ノ所感ヲ語ル」とあり、その日に取材を受けたことがわかる。

親父譲りの芝居嫌いで、歌舞伎初見物という黒田の所感をもつばら道具立の批判に費やされている。根っからの洋画家らしいコメントだが、門外漢であるにもかかわらず意見を求められてしまう当時の黒田の社会的知名度を推し量るべきであろうし、また一方で、山本芳翠を中心に白馬会系の画家が舞台背景画を手がけるようになるのもこの時期であった。白馬会系洋画家と演劇の歩みよりについては、坂本麻衣「山本芳翠と洋画背景の流行」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』

四六・第三分冊 平成二三年二月)を参照。